



モンゴル：最貧国からの離陸

いとう えいいち
伊藤 栄一

UNI-Apro東京事務所・所長

2月4日マイナス25度という極寒のウランバートルを訪れた。マイナス25度と言うと、鼻がすぐツーンと痛くなり、しばらく外にいと手足の先の感覚がなくなり、しんと底冷えがする感じだ。私が最初にモンゴルを訪れたのは1991年だった。それから毎年1～2回は訪れているから30回以上は来ていることになる。このように厳しい冬もあるが、素晴らしい夏もある。どこまでも広がる草原の所々に白いゲルの家が見える光景など、日本では見られない光景が広がる。当時モンゴルは、共産主義体制が崩れ、市場経済が導入されたばかりで、経済は混乱し、人々の月給も4,500円程度、世界の最貧国の一つだった。それが今GDP成長率は6.7%に達し、平均賃金も30万トゥグルグ（約1万8,000円、2009年）から45万トゥグルグ（約2万7,000円、2011年）へと上がった。まさに高度成長、一部の階層には所得倍増の時代が来ている。ウランバートルの町の様子もがらりと変わった。1991年当時車は少なかった。タクシーは全くなく、白タクを捕まえて目的地まで行ってもらうのだが、なかなか車が来なかった。ところが20年を経た今、町中が大渋滞である。よほど余裕をもって計画しないと、空港へもたどり着けないことになる。

今回の私の訪問だが、UNI-LCM（UNI

モンゴル加盟協）の総会に出席することが主な目的であった。UNI加盟組合は大小含め5つある。各組合を訪れ、話を聞き、意見交換したが、組織拡大方針を説明すると、すべての組合がポジティブに反応した。高度成長の中、人々の精神も前向きである。

ゴビカシミヤの例

ゴビカシミヤは、国際競争力のあるモンゴル製商品として有名な企業だが、そもそも日本の援助で出発した企業である。計画が立てられたのが1972年、引き渡し式が1981年、その間モンゴル側の技術者の育成・指導、工場設備まで、すべて日本の援助で作られた企業である。しかし、この企業も時代の流れに翻弄された。当初国営企業として運営されてきたゴビカシミヤも、2000年からの民営化が決定され、何回かオークションが行われたが、誰が買うかなかなか勝負はつかなかった。ようやく2007年にバートルサイハン氏が社長を務めるタヴァン・ボグド社が買い取るようになった。この会社は、モンゴルで手広く事業を展開する日本資本が後ろにいる会社と言われている。75～76%はタヴァン・ボグド社が買い取り、その他は民間投資家が買い取る形で決着した。その際、労働組合を認めるか否かで、経営側に意見の対立が



あったと言う。しかしジャンパー・ゴビカシミヤ
労組委員長の努力もあり、親組合的な会社として
進むことを決定した。ジャンパー委員長によれば、
国との関係（これまで良い関係であったものを
潰したら問題が起こる）、新しい経営陣とこれ
までの従業員の間に橋を架ける組合の役割、企
業の将来のためにもパートナーシップの重要性が、
説得の論拠として有効だったという。ガンバー
タル副社長は、「ナショナルセンターも我々の立場
に立って運動してくれており、モンゴル連合会長
自身年に1～2回わが社を訪れ、相談している。
是非今後も労働組合との良い関係を保ちたい」と
述べた。カシミヤの買い付けが始まる3～6月以
降工場は忙しくなる。現在では、モンゴル国内向
けが半分、国際市場向けが半分という市場構成で、
モンゴル人もカシミヤを着るようになった。「最
大の競争相手は中国だが、最近環境への配慮から
カシミヤの生産を抑制する政策をとるようになって
おり、ゴビカシミヤが国際市場では有利になる
う。ただし原料の値段が上がっており、その上給
与も上げることになれば、会社としては非常に苦
しい立場に立たねばならない」「鉱山のおかげで、
政府は豊かになっており、公務員の給料は上がっ
ている。それに引きずられないでほしい」と会社
の立場を述べた。協約交渉は今年の暮れに始まる。

これからのモンゴル

インフレ率は5.5%ということだが、人々の実
感ももっと物価は上がっているとのことだ。モン
ゴルは必ず発展し、人々も豊かになるという私見
を述べると、「あなたはウランパートルを見てそ
う判断しているが、農村は貧しい」と反論された。

客観的に見よう。そもそも270万人と人口が少
ない。しかし国富はどんどん伸びているわけで、
必ず国民は豊かになると予測できる。放っておけ
ば、厳しい生活を避ける人間の本能からして、遊牧
民の数はどんどん少なくなり、大草原のゲルとい
った光景は、モンゴルから消え去るであろう。遊
牧民の収入を増やす、何らかの計画が必要である。
人口増と共に、都市の環境問題は深刻化するが、
これも資本投下で解決できよう。労働組合は、組
織拡大を続けていけばその地位を確保し、モンゴ
ルの中で一つの政治・社会勢力となろう。鉱物資
源の輸出に頼っているところが問題だが、人的資
源への投資を増やし、世界で活躍するモンゴル人
といった姿をつくりだしていくことが重要である。

これらのことは夢ではない。すべてモンゴル政
府の計画の中にあることである。最貧国から脱し、
成長を開始したモンゴルにぜひ注目したい。